

人間科学についての一考察  
—— 全体性と統合性を求めて ——

春 木 豊

---

## 1 人間科学の現状

人間科学という言葉はひと頃とくらべてみるとかなり知られてきたといえなくもない。その理由の一つは、各大学で、この名称を付した学部や、学科が急速にふえたことによる。

鈴木<sup>(1)</sup>は、わが国の大学における人間科学部の実状について調査をした。それによると、人間科学を学部として組織している大学は8校存在している。学科としては9校あるということである。これは正確に人間科学と呼称している場合である。学部の名称をこれに限らず、人間と称したものに広げると（例えば、人間学部、人間関係学部など）更にふえて、11校追加できる。学科についても同様に広げると（例えば、人間形成学科、人間情報学科など）40校を加えることができる。しかもなお、増設される予定があるとのことである。これが専攻やコースのレベルになると更にふえることになるであろう。

鈴木<sup>(2)</sup>の調査によると、これらの学部や学科を構成する学問の内容は、ほとんどが心理学、社会学、教育学、福祉、スポーツ、コミュニケーションなどである。早稲田大学のみが、生物学を含んでいるのが例外である。

このような人間科学関連の組織が成立してきた経由をみると、最初から新設ということで出来上がった場合と、既存の学部や学科の改変という経由で出来上がった場合とに分けられる。筆者のみるところでは、後者の経由での成立の学部が多いように思われる。その典型例は、20年前に人間科学部を組織した大阪大学がそれであり、文学部に属していた心理学、社会学、教育学が独立して作られた。また、最近の例としては、京都大学の総合人間学部は教養部の改組という成立過程をとった。

人間科学部に所属する立場からするならば、このような現状は人間科学の隆盛を示すこととして歓迎すべきことである。しかし、その内容の実状を直視したとき、必ずしも単純に喜べないものがあるのも事実である。この評価は各大学の人間科学部についての理念や成立の経由によって異なってくるところであろう。後に論ずることになるが、既存の学問、すなわち心理学、社会

学，教育学，などの集合体としての人間科学を考えるだけならば，問題は何もない。しかし，人間科学そのものに特別の意味をもたせようと考えた場合には，問題はかなり深刻であるといえる。かなりの大学が人間科学部ないしは学科を組織して5年から10年になろうとしている。この間の経験によって，各大学とも見直しと反省の段階にきているといえるだろう。

この時期にあたって，人間科学について改めて，その理念や組織について考察することは意義のあることである。筆者は早稲田大学の人間科学部を創設するに当たって，人間科学について若干の考察をした<sup>(3)</sup>。10年を経た現在，改めてこの論文を読み直してみても，どれほどかの進歩があったのか，この論文に何ごとかの新しい知見を加えることができるのか，省みて内心忸怩たるものがあるが，多分終りのない人間科学の道のりの一里塚として，ここに勇を鼓して一文をしるしてみたいと思う。

## 2 人間科学の必要性

人間科学を既存の諸科学，例えば，生物学，心理学，社会学などの集合体として考えるならば，さして問題は発生しないと先に述べたが，このような人間科学の考え方は，先の論文<sup>(4)</sup>で，人間科学の束論と述べておいた。胃薬やバンソコや赤チンを一つの箱に入れて，急救用医薬品と書いておくようなものである。このような用法は，実はかなり一般的なものであるといえる。例えば，環境科学とか宇宙科学といったとき，それぞれに関連の諸科学が集まって，環境問題や宇宙という共通対象に向って協同作業をするということである。この種の科学の名称は最近非常に盛んになってきたといえる。生命科学，行動科学，社会科学などといったものも，この流れのものであるが，これらはある程度定着したといえるが，環境科学といっものはまだプロジェクト的性格が強いといえよう。

人間科学ははたしてどのような位置づけになるのであろうか。上に述べた束論であるならば，いわばプロジェクト的な性格を有するものになるであろう。しかし，現実の人間科学は個々の組織をなし，学部や大学院を作っている。したがって，問題に応じて離合集散するプロジェクトではあり得ない。急救医薬品というラベルをつけて，一つの箱に入れておくことは，それだけでも意味はある。人間科学という名称は，少なくとも急救医薬品という名称のように，急救のときに役に立つ箱であるというのと同じくらいの意味をもたなければならないであろう。

それにしても人間という意味は深く広い。あまりにも大き過ぎる感があることはいなめない。その故につかみどころがないといえる。しかし，人間科学部という名称がかくも多数使用されるようになった理由には，それぞれの成立の経由はあるにしても，それなりの時代の背景があるためであると考えられる。

人間科学が人文科学の名称にとって代って要求される理由の一つは，人間に対する関心が高まったことである。人文科学ももとをただせば，人間にかかわる学問群を意味していた。それがいつの間にか，人間を忘れ去った状況になってしまっているということである。つまり，よく言

われているように、学問のための学問（それは必要なことではあるが）、重箱のすみをほじくるといふ表現でいわれるように、それぞれの学問が、狭い世界にとじこもってしまって、本来の人間を知るという大目的を見失ってしまったという現状が、ここで復び人間を見直す必要性を意識させることになったということであろう。大げさに言えば、第二のルネサンスである。人文科学の硬直化の打破として、人間科学の必要性が意識されているといえる。

他にも理由はあると思われるが、例えば、自然科学の発展とも関係があると思われる。19世紀から20世紀にかけて、自然科学は目ざましい発展をとげた。特に科学技術の進歩は人間に多くの利益をもたらしたといえる。原子力、遺伝子操作、コンピュータ、宇宙開発、臓器移植、などは前世紀には思いもよらなかった発展といえる。このような自然についての知識の増大と、科学の成功を見たとき、省みて人間についてはどうかという思いがある。自然を大宇宙といい、人間を小宇宙といいはするものの、人間についての知識のあいまいさは比べるべくもない。もっとも人文科学において獲得してきた知識の量は膨大なものがあるが、それが先にも述べたように人間との結びつきを失っているために、生きていないのだともいえよう。人間の側面である身体については、知識も技術も進んでいるわけであるが、身体を自然の一部とみるか人間の一部とするかという根本問題はあるにしても、人間という枠組でみたとき、人間の知識としてうまく組込まれていないのだといえる。この辺の事情は次にも述べる。

この問題に関連してもう一つ言えることは、人間に対する科学の適用の遅れがある。人間を科学できるかという困難な問題があるが、これは後に論ずるとして、自然についての科学の成功を横にみて、人間の科学はどうなっているのだという意識が潜存している。そのはけ口が、心理学への急激な関心の高まりを現在引き起しているといえる。換言するならば、精神の科学への関心である。これは一方で、宗教に対する無関心、不信感が原因しているのであるが、このことについては、ここではふれない。

人間に対する関心は、身心の相関の問題が新たに医学で起ってきたことと関係がある。心身症という病名の流行である。「病は気から」という言葉の復活である。伝統的な医学は、身体を物体・物質と考え、科学のメスを縦横無盡にふるって大成功をおさめてきたことは、誰しもが認めることである。ところが極最近になり、このような医学の考え方では処理できない病気が存在することが認識され始めた。それが心身症である。簡単に言って、心が原因でおこる体の疾患である。そしてこの心身相関の問題は、従来は哲学の課題であったが、今や精神神経免疫学の出現にみられるように科学的方法で、実証しようというところまで来た。実際に実証され得るものかどうかは今後の展開をみないと断言はできないが、状況はそこまできているということである。このことは、あらためて人間とは何か、人間をどのように理解していったらよいのか、その認識の方法についても問われるようになってきたといえる。

人間に対する反省は、上に述べてきたこととは逆の面からもおこってきたといえる。それは科学が引き起こしている害である。このことが最も民衆の間で認識されたのは環境問題であろう。

自動車や産業が排出する物質による空気汚染であったり、更に深刻だったのは産業廃棄物による人体への害であった。その他にも原子力発電所の事故の恐ろしさ、あるいは薬害がもたら悲惨な結果は耳新しい事件である。また、どうなるかわからない不安として民衆がいただいているのは、化学物質によって処理されている食品が将来の人体に及ぼす影響である。これらのことは、人間が生んだすばらしい知恵と思っていた科学そのものに対する疑惑を感じさせ始めているといえる。そしてそのような自己矛盾に落入る人間とは一体何ものかということである。

以上述べてきたように、人間科学に対する関心はさまざまな現代の状況の中で起こっているという認識がまず必要である。それ故に現代がかかえているさまざまな問題解決に向けての人間科学であり、人間科学部でなければならないということである。そこで、人間科学についてこれから論ずるに当たって、どこに焦点を当てるかが問題であるが、ここでは根本問題にしぼりたいと思う。人間科学の方法と対象についてである。これは大それた話であるし、とうてい筆者の力の及ぶテーマではないのであるが、人間科学部に身をおく一人としての義務でもあり、責任でもあると考えるので、敢て試みるものである。

### 3 人間科学の方法 —— 全体性について ——

#### 1) 人間科学の方法は何か

人間科学が一つの科学であるのか、いくつかの科学の複合体なのか、このことについての議論ぬきに方法の問題は論ずることはできないが、現状をみるとほとんどは、既存の諸科学の集合体として組織されている。それが現実的でもあるし、それ以外には現状では不可能である。したがって、その方法もそれぞれの諸科学の伝統に従ってなされている。現実にはこれ以外にないのであるが、人間科学として一堂に会したとき、そこに何か目ざす共通の目標もあってよいのではないであろうか。

人間科学が成り立っている一つの理由は上にも述べてきたように、人間を一つのまとまりとして、人間として理解してゆこうということがあったといえよう。この目標は換言するならば、人間という全体を扱うということである。一つのまとまりとしての人間をばらばらにしないで、一つとして理解できないであろうかということである。従って、その理解の仕方（方法）もそれに見合うものを考えなければならない。

このことについては、これから議論してゆかねばならないのであるが、ここではその一つの試みとして、全体性の方法について考えてみたい。

#### 2) 科学の特徴 —— 全体は部分から成り立つ ——

科学は人間の行なうものごとの認識の仕方の一つである。その特徴にはいくつかあるが最も特徴的なことは「分析」であるといえる。科学の出発は分類から始まるといわれているが、植物も動物も分類されており、物質も分類されている。分類は分けることであり、分析の一種であ

る。分類することによって、雑然とした世界が、見えてくることは事実である。分類することによって知識が生まれてくるといえる。

科学の特徴は分析した結果としての要素を求めるということでもある。全体は部分から成り立つという発想である。したがって、物理学は、分子→原子→電子→素粒子→クォークと究極の要素を求めての旅であったといえよう。究極の単位である要素がわかれば、全体はわかるという考え方である。このことは生物学でもそうである。最近のめざましい進歩である遺伝の分野における遺伝子の発想も同じであるといえる。同様に医学の分野では臓器移植が行なわれるようになったが、身体は部分である各臓器の集合体であるという考え方からこのことは行なわれているといえよう。自動車の部分をとにかえるのと全く同じ発想である。

### 3) 全体は部分の集合ではない

部分をよせ集め、加算することによって全体は成り立つという単純な発想は明解ではあるが、現実にはなかなかその通りにはゆかないことがある。上にあげた臓器移植の例をとり上げると、自動車の部品交換とは実は全く異なることが生ずる。よく知られているように免疫現象の存在である。もともと自分のものとは異なる異物が体内に入ってくると、自己を護るために免疫細胞が活動を開始し、たいがいの場合、異物は殺されたり、排除されてしまう。臓器移植はこの現象に対抗しながら定着を計るのである。このことは、生体では各部分（臓器）は全体との関係の中でのみ存在しうるということである。部分は全体と折り合をつけながら存在しているといえる。

全体は部分から成り立つという伝統的な考え方に対する疑問は他の例でも考えることができる。例えば、水について考えてみよう。水は $H_2O$ と化学では理解している。すなわち、水素 $H$ と酸素 $O_2$ という要素（部分）から成り立っているということである。しかし、水は水素とも酸素とも全く異なったものである。水は液体であり、水素も酸素も気体である。全体は部分とは全く様相の違ったものである。したがって、水は水として知らなければならない。単なる部分の集合でないことは明らかである。現に化学においても、水素と酸素から水を合成するためには、単純に二つをまぜる（加算）だけではない。熱を加えるといった別の操作を必要とするのである。分析して要素に分けたとしても、それを全体に統合するためには、要素が分っただけではだめであるということである。筆者が特にここで強調しておきたいことは、要素は気体で、全体が液体であるという違いである。液体を分析した結果、その要素が気体であるということの発見、そしてその逆にそれを合成すれば、もとの液体になるという科学の成果は刮目に値することなのであるが、要素をいくら知っても全体を知ることにはならないということの方に注目したいのである。水は水として知らなければ、水の理解にはならないということである。水を直接経験することなしに、水とは何かを知ることにはできないというこの単純な事実を忘れてはならないのである。

全体は要素の集合ではないということをもう少し示してみよう。心理学の分野で起ったことで

あるが、1920年代にベルリン大学の心理学研究室に集まった一群の心理学者達が、心理学の考え方に一つの革命をよび起こしたのである。この運動をゲシュタルト学派とって、今でも心理学史上よく知られている。この学者達は知覚の研究を例にして、自らの主張を実験的に示したのである。知覚の一つの現象として運動視の問題がある。暗室の中で、光点を一点から他に移動すれば光点の運動視が経験される。これには何んの不思議もない。しかし、今、二つの光点A点とB点をなるべく近くにセットし、一方を点燈し、消した後に、なるべく早く、他方を点燈し、消すという操作をすると、二つの光点の間を光が走るという知覚が生ずる。これは仮現運動と名づけられているが、この現象はさしてめずらしい現象ではなく、例えば日常目にする現象としては、電光掲示板の文字がスムーズに動いて見えるのがそれである。これは光が次々に点滅しているのであるが文字が動いているように見えるのである。この現象の意味は、A点とB点の間には光は存在しないにも拘らず、光を感じずということであって、光の軌跡は光点の移動という光点の要素の集合によらずとも生ずるということである。この仮現運動現象は要素説では説明できない。適切な距離におかれた二つの光点の適切な時間間隔による点滅という全体の布置によって生ずるといふ、全体説でしか説明できない。全体性の考え方の有効性を示すものとして、ゲシュタルト学派は注目を集めた。しかし、この学派自体の発展はなく、その後消滅してしまった。この学派の考え方は歴史的なものであるが、全体性の考え方の有効性を実証したものとして、貴重なものである。

#### 4) 全体性を考える方法

伝統的な科学の方法は、400年に及ぶ歴史の中で洗練され、精緻なものになっている。その特色については、すでに述べたが、素直に言って、人間科学の全体性を求めるという方向とは完全に矛盾する。このために、人間科学は、科学といえるのかといった議論も成り立つ。

しかし、科学という定義自体の問題になるのであるが、最近、科学の諸分野で、伝統的な科学の概念に反して、新しい見解が示されつつあるようにみられる。筆者には浅学のためよく理解できていないのであるが、科学の最先端とゆく理論物理学においては、今世紀に入ってから、不確性原理、量子論、あるいは素粒子の探求の不成功などから伝統科学の変革はすでに始まっているといえる。

筆者の専門分野である心理学を例に上げて説明しよう。心理学は先行諸科学をモデルにして出発したため、実験室での研究を中心に発展してきた。実験室での実験ということは、いわば真空実験とでもいべきものでなるべく関与変数以外の変数を排除して、純粋な環境を整備して、関与変数（原因）の効果（結果）を確認するという方法である。このような方法は長い間、科学の研究法の王道として尊重されてきたのである。しかし、最近になり、生態学的方法の必要性が言われるようになってきた。実験室で得られるデータは現実的ではないというのが、基本的な批判点である。それよりも条件統制をせず、現実のまゝに事実を観察しようというのである。この

ことは何を意味するのかであるが、現実には無数の条件があるのであり、単一の原因に対する単一の結果というのは、まれな場合に過ぎないのである。存在する多数の条件をそのまま含んで、現象（事実）をみつめようということである。また、実験室実験では、因果関係を原因から結果へとリニアな関係しか考えてこなかったが、現実には、このような関係はある時間の流れの中での瞬間のできごとにすぎなく、長い時系列で考えるならば、因果関係はもっと相互にダイナミックなものであるといえる。このような生態学的方法は、心理学の分野で次第に盛んになりつつあるが、まだ確立しておらず、方法自体の発展が今後期待されている。

全体を理解する考え方として、最近注目されるのが、システム論的な考え方である<sup>(6)</sup>。これは、全体と部分との関係を理解する上で、非常に分かりやすいすぐれたパラダイムであるといえる。全体の統一を考えながら、なお部分の自律性を保障する考え方であるともいえる。

この考え方は図1に示されたようなものになり、日頃見なれた図である。トーナメントの組合せ図であったり、会社の組織図であったり、人体の構成図であったり、進化の過程図であったり、動植物の分類図であったりする。このような変哲のないものであるが、個と全体を理解する共通の、あるいは基底の考え方を示すものといえる。但しこの図で注意しなければならない点が二つある。一つは、個々の結び（図の四角）は、全体に依存しているのではなく、あるいは全体を構成する単なる部分（レンガのようなもの）ではなく、十分に自律し、それぞれの位置において個性をもって、全体を構成しているということである。もう一つは、個々の結び目間のコミュニケーションの存在である。情報が十分に疎通して個も全体も生きていたものとなるということである。

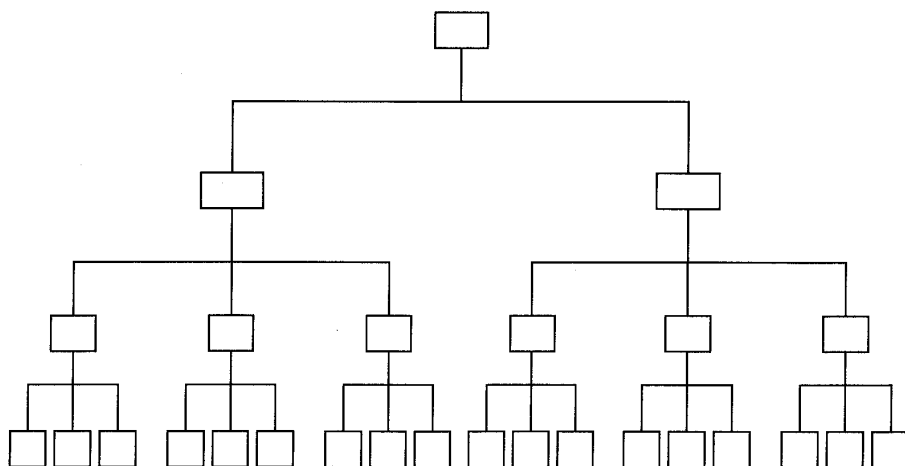


図1 システムの図

これを人間科学を構成する諸科学と人間科学との関係に当てはめて考えてみると、心理学や社会学や生物学はそれぞれの学問のもつ特性に応じて、人間の研究を行なう。対象も方法も個性が

あってよい。生物学は身体を対象に実験分析という方法を用いる。心理学は心を対象に、実験や生態観察を行なう。社会学は、集団を対象に、調査を行なう。このように言うと、これは従来の理学部の生物学であり、文学部の心理学や社会学と変りないことになってしまうが、システム論的な考え方、すなわち、全体は部分からなりたち、部分は全体を含むという考え方からみるならば、人間科学としての生物学は、人間という視点を常に含んでいることである。具体的には、心理学や社会学の情報を知りつつ、生物学を行なうということである。他の学問も同じことである。この結果として、協同研究や学際研究ができればなお望ましいことである。

このような有機的な関係は、正に有機体である生体では実現していることである。個々の臓器や細胞はそれぞれ個有の機能（役割）をもっていて、他にとって代えられない。しかし、一つの臓器はそれ自体では生きてはゆけず、他の臓器によって支えられている。そして、全て中枢によってコントロールされているばかりでなく、個々の部位で自律性を維持していることが最近の研究で明らかになってきている。組織心理学でも、企業の組織は一人一人の社員が企業の一員として、ある部署を責任（自律的に）をもって遂行し、社員としての生きがいのある仕事ができるためには、全体の情報をよく知り、その上で自律的な行動ができる組織にすることであると言っている。全体と部分の関係を考える上で、システム論は有効なパラダイムであるといえる。

人間を全体的なものと考え、それをまるごと理解するには、伝統的な分析中心の科学の考え方では、不可能にみえる。伝統的な単純化を求めて止まない科学の考え方に対して最近、「複雑性の科学」という考え方が導入され始めた。これは複雑なことは複雑なまゝ単純化しないで、理解しようということである。モラン<sup>(5)</sup>は複雑性についてその考え方の特徴を三つ上げている。第一の原理は「対話論理的」と称しているもので、対立し矛盾する二つの項は、相互に補完的なのであると考える。生産と秩序化は同時に破壊消滅と無秩序化があって成り立つ。第二の原理は、「再帰性」といい、原因結果の相互性である。原因は結果になり、結果は原因となるという循環の考え方である。第三の原理は「ホログラム」現象で、全体は部分を含み、部分は全体を含んでいるということである。このような考え方はすでにくり返し述べてきたことと一致した考え方である。また、モランがもう一つ述べている中で興味深いのは、自己一生態一組織化である。これは、組織は内部に消滅、生産をくり返しながらも、組織は維持されている（細胞は日々消滅し、生産されて、日々変化しているにもかかわらず、同一の自己は維持されている）。しかも、この自律的な自己組織は常に外部環境との交流の中で生じていることで、開放系でなければこの自己組織は維持できない。このこともここでは、すでに再三述べてきたことである。この考え方については、これ以上述べないが、ここに述べられていることは、実は佛教思想においてすでに述べられていることであり、また西田哲学の論理と通ずるものであることを指摘しておきたい。

以上、全体性にかかわるいくつかの考え方を述べてきたが、その重要性については理解できるとしても、やはり問題は具体的な操作法が示されていないことである。伝統科学には、具体的な分析の技法が存在している。そこから成果が生み出されてきているのにくらべて、全体につ



いては、それを知る具体的な技法がまだ示されていない。複雑性の科学から出てくる可能性があるが、今後の成果を期待するほかない。

#### 4 人間科学の対象 —— 統合性について ——

##### 1) 人間諸科学の対象と人間

人間科学の対象は人間である。しかし、人間をそのまま対象にしてきたのは、今までは哲学であったといえる。科学的認識論では、それぞれの学問は人間を分断し、それぞれが個有の対象を人間に求めて行なってきたといえる。このことについての事情を池田<sup>(6)</sup>はフランクルのモデルを紹介し、たくみに説明している。すなわち図2に示されているように、人間に関する諸科学は、対象である人間をそれぞれの角度からみているものにすぎないという。それぞれの角度からみた人間像は同一の人間であるにも拘らず違って見えるというのである。このモデルは、ここで取り上げている問題を理解するのに非常にわかりやすい。人間諸科学はそれぞれを対象を上げているが、それはそれぞれの立場から定義したものであり、相互に異なっている。しかし、いずれも本来の対象である人間の一つの側面、一つの陰なのである。諸科学の対象と本来の人間との関係をどのように考えるかであるが、立体物の投影図から本体を推察したり、作成したりすることができるが（図3）、それと同じように人間諸科学の対象から、本来の人間を推察することになる。このこと自体は現実にはかなり困難であるが、諸科学の成果をふまえて、人間像を描いてみせるということは、従来から哲学者達が試みてはいる。

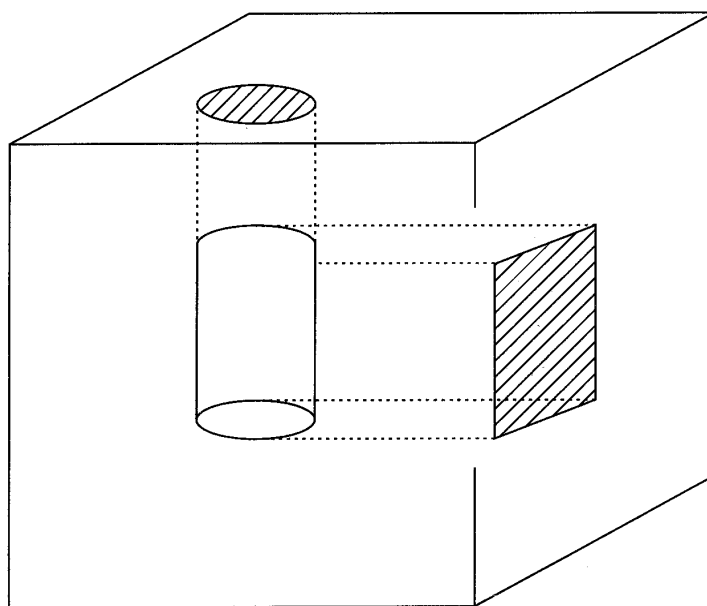


図2 フランクラルのモデル

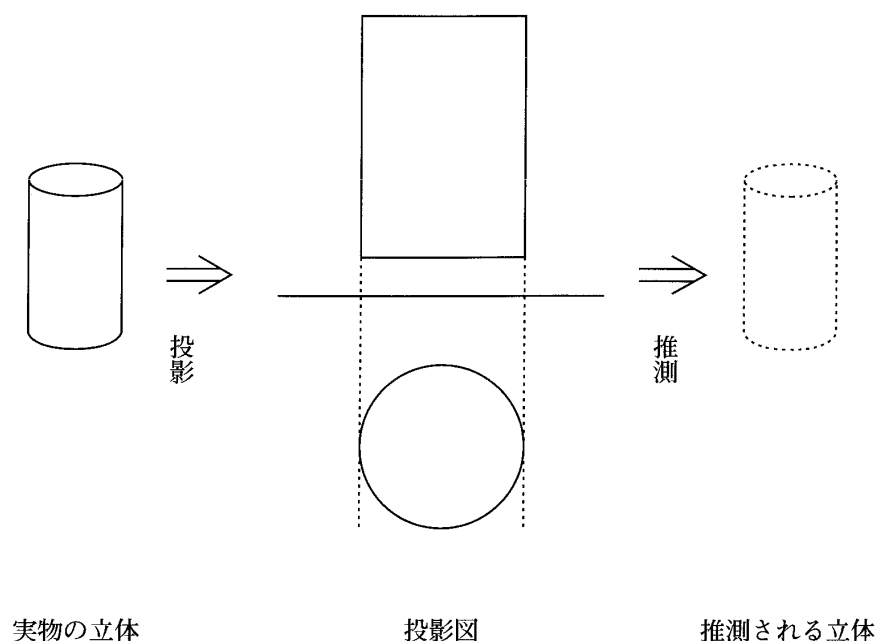


図3 投影図から立体の推測

しかし、このことはある意味では奇妙なことである。フランクルのモデルを例にしていうならば、さまざまな角度から投影された陰から、本体を想像することはできるであろうが、本体そのものはそこにあるのであり、それそのものを見たり、さわったりすることで、本体は容易に認識できるのである。人間と人間に関する諸科学がとらえる対象との関係も同様のことがいえる。人間自体が目前にいるのであるから、人間自身を対象にしてもよい筈である。このことについて更に以下で論ずる。

## 2) 人間に関する5元説

人間に関する諸科学は多数あるが、ここであえて選ぶとすれば、図4に示されているように<sup>(7)</sup>、人間の諸側面を精神、身体、社会、自然、それに行動と分ければ、それに対応する学問としては、心理学、生物学、社会学、生態学、行動学があるとしておきたい。これらはフランクルのモデルによれば、人間という本体をさまざまな角度から光を当てたときの投影であるといえよう。

上に述べた諸科学について、ここで説明することはしないが、行動学のみについては若干説明を必要とするであろう。ここに行動学という学問を取り上げる理由については次節で述べるとして、行動学とは何を想定したものであるかについて述べると、この名称は既存のものではない。これにかかわるものとして、動物行動学があり、また心理学の分野に、行動主義心理学にもとづく、行動理論がある。行動学はこれを統合したものとして考えている。筆者<sup>(8)</sup>は行動を行為、動

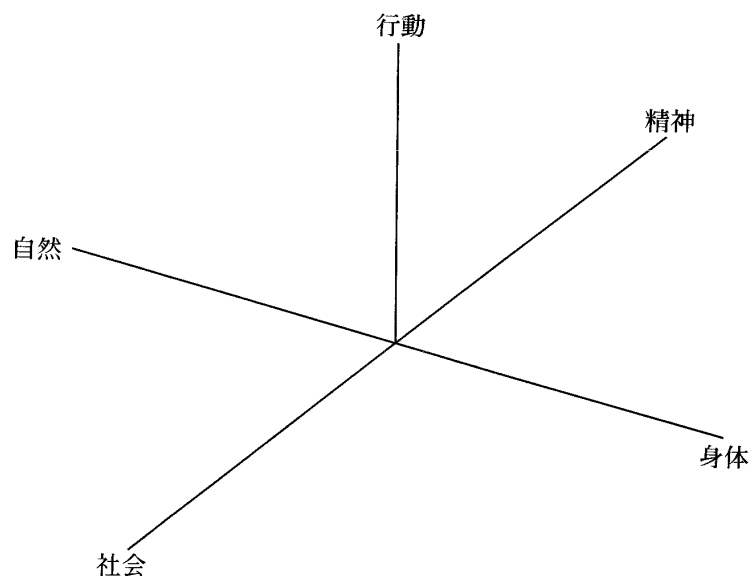


図4 人間に関する5次元

作，体動，反射の下位概念から成り立つものとし，これらの動きそのものを研究の対象とする科学を行動学と定義した。行動を中心にすえて人間を追究するものである。ただし行動は下等動物から現象しているものであるため，行動学は動物とも通底する人間の研究でもある。

### 3) 人間科学を統合するものとしての行動

人間科学がめざすのは，人間という対象である。自然を対象とする自然科学に対応するものであるといえる。フランクルのモデルによるならば，投影像ではなく，目前にある立方体そのものである。したがって，人間科学の対象は人間であるということであり，それ以上の概念を必要としない。このことが，人間科学として諸科学が集合する理由でもあった。しかし，このことに問題がなくもない。その一つは，科学であるということである。対象を人間としたとき，科学の場合，人間という全体的な概念の対象では具体的な作業が出来ない。当面，科学の対象は分析できるものでなければならない。あるいは次のように言えるかもしれない。先に述べた全体性を満足させる方法論が出現したあかつきには，人間という複雑な対象でも可能になるかもしれないが分析という方法をとっている現代の諸科学の現状からいうと，対象は人間という全体的なものではなく，分析できるものでなくてはならないということである。したがって，人間に代る概念を必要とするということと，且つ諸科学が共有できる，あるいはそれを統合できる概念を求めることになる。

このことについての一つの提案として，ゲーレンの説を上げることができる<sup>(9)</sup>。このことにつ

いては、宮内<sup>(10)</sup>がすでに取り上げ詳細に論じている。また筆者<sup>(10)</sup>もゲーレンを取り上げた。ゲーレンは人間科学を論ずるに当って、人間についての心身二元論を越える概念として、また科学の対象としての概念として「行為」を上げることができるという。行為は基本的には、身体の動きであり、また精神を含んだものである。行為において、身体と精神は統合されているといえる。また、行為は状況（環境）の中で現象しているのであって、状況を含んだ現象でもある。これらのことは何を意味するのかというと、行為は生きた現実の人間であるということである。行為はそこに現象している具体的な人間の全一の姿である。まぎれもなく、今、ここに現象する人間である。抽象的な人間ではない。そのような行為を対象とすることによって、人間諸科学は統一的な対象をもつことになるといえるであろう。

筆者は、行為の代りに行動という言葉を使う。この行動の概念は心理学における行動主義で意味している行動の概念とは異なる。それは上にも述べたように、人間（動物も含む）のあらゆる動きを含む上位概念としてある。反射は下等動物から人間まである動きであるが、ほとんど環境とのかかわりで生じている。体動（表情・姿勢など）は反射に近いが、精神（気分）とのかかわりを若干もつ点、より高度な動きである。動作は身体の移動を含むより複雑な動きである。精神の関与もより深くなり、気分、感情よりもより認知的な関与がある。行為は更に高度で複雑な動きであり、より精神的な側面の関与が多くなる。

更に、筆者<sup>(11)</sup>は行動について、もう一つの意味を考えている。それは、従来の行動についての考え方、あるいはここで述べてきた行動（行為）の考え方は、精神や身体や環境の統合としてのものであった。それらの結果としての行動であるということもできる。これに対して、行動は精神や身体や環境に影響を与えるものとして考えることができるということである。前節で述べてきたように、複雑性の考え方からするならば、原因と結果は相互的であらねばならない。行動は結果であることもあれば、原因となることもある。行動することで環境に変化をおこすことができ、行動することによって精神が変わることもある。このようなことは日常よくおこっていることである。原因としての行動は、バンデューラ<sup>(12)</sup>によっても示唆されている。彼は因果関係の相互性を述べ、従来、行動と認知と環境の関係をレビンの $B = f(P, E)$ の式（ $B$ ：行動， $P$ ：行動する人， $E$ ：環境）で表現してきたが、これは $P$ や $E$ によって $B$ が決定されるということである。原因は $P$ と $E$ であり、 $B$ は結果である。これに対してバンデューラは、たとえば $P = f(B)$ という関係も考えられると述べている。 $B$ が原因で $P$ が決定されるのである。筆者は $B = f(P, E)$ は行動の構造論であり、 $P = f(B)$ は行動の機能論であると述べた。両者あいまって、人間を統合する概念としての行動の意味が出てくるものと考えている。

## 5 全体的、統合的な人間科学

人間は全体的で統合的なものである。有名なデカルトの二元論によって、人間は心と身体に分けられてきた。それによって、身体の研究の驚異的な進歩がみられたが、すでに述べたように、

これについては問題が生じつつある。

人間の心身を考えたとき、心身を分けない言葉として身心一如がある。一如とは身心はもともと分けられない一であるということである。しかし身心一如とって一如とはいうものの身心と表現することはすでに心身を分ける思想が背景に感ぜられる。ところが身という文字について考えてみると、市川<sup>(13)</sup>が詳細に説明しているように、さまざまな意味を含んだ文字であることがわかる。要するに、身は体という意味だけではなく、自己のことであったり（わが身）、社会であったりする（身分）。身はどちらかというと体の方から人間の全体を含む意味をもつ言葉であるが、精神の側から人間の全体を表わす言葉がないか調べてみたところ、驚くべきことに、心という文字がそうであることがわかった<sup>(14)</sup>。心（シン）とは元来ころ（精神）であるよりは、心臓のことなのである。肝や腎と同じである。心という文字はそれ一字によって、心臓ところ（精神）を含んものであるということになる。英語でもheartは心臓であり、ころである。全く同じであるということに、あらためて驚きを感じる。

この例でもわかるように、もともと人間は全体的、統合的な存在として理解されていたのである。分析主義の科学思想によって、事情が変わってきたのだといえる。科学思想に限らず、基本的に知識とは分ける（わかる）ことであるといえるかもしれない。理性や知性による理解は二元論からのがれられないのかもしれない。しかし、上に述べてきたように全体性をとらえる思考方法の発見が将来に期待されるのである。

このことに関して、最後に一つだけ述べておきたい。先に水の例で示したように、それを理解するという事は、分析して酸素と水素であるということになる。しかし、水を水として全体的に知るといふことになると、それは、水を見て、さわって、飲んでみるという直接経験以外にはない。知性による理解は分析にならざるを得ないのが現状であるが、全体性統合性による理解の方法が将来発見されるとしても、直接経験、換言するならば、感性による理解（知ること）も棄て去ることはできないと思われる。全体性の理解の方法には、感性も含まれるような気がしている。

全体性、統合性をもつ人間を追究する人間科学は、人間から出発するという事であり、徳永が<sup>(15)</sup>述べているように人間についての科学であるよりは、人間のための科学でなければならぬであろう。

#### 註

- (1) 鈴木晶夫 1996 人間科学のイメージ フォーラム 人間科学を考える報告書15-26
- (2) 鈴木晶夫 前出(1)
- (3) 春木豊 1988 人間科学への態度 ヒューマンサイエンス, vol.1 3-10
- (4) 春木豊 前出(3)
- (5) Edgar Morin 1990 Introduction à la Pensée complexe ESF éditeur:Paris (古田幸男・中村典子訳 1993 複雑性とはなにか 国文社)
- (6) 池田善昭 1991 システム科学の哲学—自己組織能の世界 世界思想社

- (7) 春木豊 1992 人間科学と行動学 早稲田フォーラム, 第65号, 121-127
- (8) 春木豊 1989 行動とはなにか —その意味と定義— 臨床栄養 vol.74,NO.4,409-415
- (9) Arnold Gehlen 1961 Anthropologische Forschung. Rowohlt Verlag.  
(亀井裕・滝浦静雄他訳 1970 人間学の探究 紀伊国屋書店)
- (10) 宮内陽子 1985 哲学的人間学に関する覚え書き——哲学的人間学の二, 三の基本概念について——札幌学院大学人文学部紀要 38号, 1-22
- (11) 春木豊 前出(7)
- (12) Albert Bandura 1977 The self system in reciprocal determinism. American Psychologist 33, 344-358
- (13) 市川浩 1984 身の構造——身体論を超えて—— 青土社
- (14) 大漢和辞典 「心部」心 p. 4339
- (15) 徳永恂 1989 人間科学とは何だろうか——ゆらぎの中で自己反省と自己組織化——大阪大学人間科学紀要 15巻, 3-19

(はるき ゆたか 早稲田大学人間科学部教授 行動学専攻)